

διαλεκτική ἢ λογική

— Ammonios Hermeiou, In De Interpretatione, Prolegomena

水落健治

序

1、古代末期から中世初期に至る言語思想を考察するに際して、紀元五世紀から六世紀にかけて活動したアレクサンドリアの新プラトン派は、特に重要な歴史的意義をもつと考えられる。プロクロスを輩出したアテナイの正統新プラトン派との密接な関係のもとに成立したこの学派は、ヘレニズム期以来のアレクサンドリアの文献学の堅固な方法論に立脚しつつ、⁽²⁾ アリストテレスやストアの遺産を批判的に摂取し、アテナイのアカデメイアなきあと、一一〇年⁽³⁾ 余りにわたって古代哲学の伝統を保持し、キリスト教との

緊張関係を緩めつつ、⁽⁴⁾ これをポエティウスらに伝えた。

そこでわれわれは今回、アレクサンドリアの新プラトン派の中心人物であるアンモニオス・ヘルメイウー Ammonios Hermeiou (四三三/四三三—五七二/六、以下 Amm. と略記⁽⁵⁾) の著作『アリストテレス「命題」註解』の序論を中心に、ストアの言語理論 (Dialektikē) とアリストテレスの論理学 (Logikē) との接点の一面に光をあててみたい。⁽⁶⁾

I

2、アレクサンドリアのプラトン学派の学問研究の性格は、「分類」、「体系化」、「専門性」といった語によって特

徴づけられる。そこでは、フィロンやオリゲネスらにまで遡る文献学や註解の伝統が、無味乾燥といわれるまでに体系化・定式化され、解釈という行為に関わるあらゆる事項が、固定化した枠組みの中で、分類され理解されていた。われわれはこのありさまを、彼の『カテゴリーア註解』の序文の中に見て取ることができる。⁽⁷⁾

3、この箇所でAmm. は、アリストテレスの哲学について論じるに際して有益な十個の問題を提起することをもって註解の序論を始めている。

- 1、哲学諸学派の名前はどこに由来するのか
- 2、アリストテレスの著作はどのように区分されるか
- 3、どのアリストテレスの著作から始めるのがよいか
- 4、アリストテレスの哲学はわれわれにもたらす明らか
な益は何か

5、アリストテレス哲学へと導くものはいかなる種類の著作か

- 6、哲学の講義の聴講者はいかなる心構えをもつべきか
- 7、叙述の形式にはいかなるものがあるか
- 8、なぜ哲学者は論点を敢えて曖昧にしているのか
- 9、アリストテレスの個々の著作を学ぶに際しての前提

条件には幾つものものがあり、どのようなものがあるか
10、いかなる人がアリストテレスの著作の註解者となるべきか⁽⁸⁾

そして、これらの問題のそれぞれについて、解答が分類・列挙される形で与えられて行く。たとえば、第一の問題に対するAmm.の解答では、哲学諸学派の名前の由来が七つに区分されて説明される。

1、創設者の名前が学派名となったもの(ピュタゴラス派、エピクロス派、デモクリトス派)

2、創設者の出身地が学派名となったもの(キュレネ派)

3、学派の人々が学んでいた場所が学派名となったもの(ストア派など)

4、学派の人々の生活の仕方が学派名となったもの(キュニコス(犬儒)派)

5、学派の人々の議論の仕方が学派名となったもの(判断中止派 (ἐπειρητοί || 懷疑派))

6、学派に付帯することがらが学派名となったもの(逍遥学派)

5、学派の目標・目的が学派名となったもの(快樂派)⁽⁹⁾

4、このような無味乾燥ともいえる分類・列挙は、この

学派では固定的なものであったようである。たとえば、

Amm. は『命題論』註解』の冒頭で、「語られたことがらの解明に通常先立つ五つの主題」των ἑννυε κεφαλαίων ... τῶν προλαμβάνεσθαι τῆς τοῦ ἤθητοῦ σαφηνείας εἰσόδου (9) について語り、およそ何らかの著作についての註解が行われる場合には、これに先だって、(1) 著作の目的、(2) 著作の他の著作との関連、(3) 表題の根拠、(4) 著作の真作性、(5) 著作の章区分、(6) 著作がもたらす益について論じなければならぬが、(6)は、(1)から(5)まで論じることによっておのずと明らかになるだろう、と述べているが、これら六つの主題 κεφάλαιον は、全く同様な形で『カテゴリア』註解』の序論にも現れているからである。われわれは、かかる方法論が、たとえばオリゲネス等に萌芽の形で現れるのを見るのであるが、以上のような事実から、われわれは Alexandria のプラトン派の性格について次のような判断を下すことができるであろう。

—紀元五〜六世紀の Alexandria の新プラトン学派においては、ヘレニズムや古代末期において用いられていた「文献学」の方法が極限にまで展開・

整備され、方法的に固定化していた。

5、さて、われわれが今回取り上げる『アリストテレス「命題論」註解』は、ギリシア語で AMMONIOT TOY EPHEIOT TIOMNHMA EIS TO PEPH EPIMH-ELIAS と名づけられている。ここに用いられる ὑπόμνημα (「メモ」、「ノート」、「覚え書き」) という語は、Amm. においては、註解のひとつの著作形式を表す学術用語として用いられていた。彼は、『カテゴリア』註解』の序論(14)の中で、アリストテレスの著作を、(1)個人的著作 ἑρμηνεία (e.g. 書簡など)、(2)普遍的著作 καθόλου (『靈魂論』、『生成消滅論』、『天体論』など)、(3)中間的著作 μετὰ τὸ (『アテナイ人の国政』など) に区分した後、普遍的な著作をさらに「覚え書き」ὑπόμνημα と「体系的著作」συνταγματικά とに区別し、両者の成立について、次のように語っている。

……というのも次のことを知らなければならぬからである—古の頃には、何らかの著作が体系的に執筆されようと企図される場合には、彼らが部分的に発見した事項は特定の主題の論証に向けて統合的・

要約的に書き下されていた。その一方、彼らは、正しい事項を確定し、そうでない事項を論駁せんがために、さらに古い著作から多くの思索を受け取っていた。そして彼らは遂に、体系化 *κατασκευάζειν* を自らの課題となし、統合的著作 *συνεργημα* を、言葉の美しさと叙述の装飾とによって輝かせつつ企図して行ったのである。

こういふわけで、「覚え書き」 *ὑπομνηματικά* と「体系的著作」 *συνεργηματικά* とは、体系性 *τάξις* および表現の美しさ *ἐπιμνηστικὸς κάλλος* において異なってきた。⁽¹⁵⁾

6、このテキストは、ある著作家が、みずから発見した断片的事項を手がかりに、過去の著作を参照しつつ、統合的著作 *συνεργημα* をまとめ上げ、その過程で「覚え書き」と「体系的著作」とを作り上げて行く過程が明確な段階を追って述べられている。その過程は、次のように要約されよう。

1、著作家が、何らかの事項について断片的な発見を行う。

2、それらの断片的な事項を、特定の主題の論証に向けて体系化 *κατασκευάζειν* し、要約的に書き下す *κεῖσθαι*。

3、その一方で、正しい事柄を確定し、そうでない事柄を論駁するために、過去の著作から多くの思索を受け取る。

4、体系化 *τάξις* を自らに課する。

5、統合的著作 *συνεργημα* を、言葉の美しさと叙述の装飾によって輝かせつつ企図して行く。

7、これらの諸段階の中で、「覚え書き」は第二、第三段階に位置するものと考えられる。今この記述を手掛かりに「覚え書き」の性格を列挙するなら、それは次のようになる。

1、「覚え書き」は、著作家が自らが発見した断片的事項を「体系的著作」にまとめ上げて行く途中段階で書き下される著作である。

2、「覚え書き」は、いまだ厳密な体系性を有してはいないが、そこで扱われる事項は「主題・要約」 *κεφάλαια* の形で概括的にまとめられている。

3、「覚え書き」の中では、著者の主張を確定するために、過去の諸学説が批判的に吟味・論駁される。

4、「覚え書き」は、「体系的著作」に較べると、言葉の美しさと叙述の装飾の点で洗練されていない。

8、以上述べられた「覚え書き」に関する説明は、『カテゴリア』註解の序論に現れているものであるが、この説明はそのまま『命題論』註解なる著作に妥当するものと考えられる。Amm.が『命題論』註解序論で論じている「語られたことからの解明に通常先立つ五つの主題」の第五「著作の章区分」*τίς ἔστι τὰ κεφάλαια τοῦδε τοῦ βιβλίου διαίρεσις*は、本著作が「主題・要約」*κεφάλαια*の形で書かれていることを前提しているからである。⁽¹⁷⁾

9、かくしてわれわれは、以上の「覚え書き」に関する説明から、『命題論』註解という著作の性格を知ることができる。ここには、「体系的著作」*συνοπτικὴ*における以上に、当時の諸学派の論争のありさまが赤裸々な仕方で見られているのである。以下われわれは、その序論を中心に、アリストテレスの「論理学」*νοητικὴ*がストアの「弁証法」*διαλεκτικὴ*といかなる折衝を経て成立して行くのか、

その過程を追ってみたい。

II

10、Amm.は、『命題論』註解の序論の実質的議論⁽¹⁸⁾を次の言葉で始めている。

では、本著作の目標は何であろうか。というのも、他の事柄に先立ってまず確定しなければならないのはほかならぬこのことであり、これに続く事柄はこの目的のために語るのだからなければならないからである。……

論理学の学習の目的は論証を発見することであるが、これには「単純な推論」の知識が先立つ。そしてこれにはさらに、一個の推論を構成する様々な「単純な命題」*ἁπλοῦς*についての考察が先立つ。またこれには、単純な命題を生み出す基となる「単純な声」⁽¹⁹⁾を類に応じて捉えることが先立つのである。

そこでアリストテレスは、『カテゴリア』なる著作において「単純な声」に関する考察を提示したが、本著作においては、様々な「単純な声」の結合によつ

て完成される「単純な命題」λόγους をわれわれに示そうと企てた。すなわち、いにしえの人々が「命題」πρότασις⁽²⁰⁾と名付けたものを、何らかの推論を行おうとする者たちが言論の相手に提示するものとして示そうと企てたのである⁽²¹⁾。

11、この箇所は、註解書(= ὑπόμνημα)の序論において論じられるべき「語られたことから(i.e. 本文)の解明に通常先立つ五つの主題」の第一、著作の目標 πρόθεσις について論じる箇所である。このAmm. は、論理学の学習の目的 τέλος という大前提を掲げ、それを「論証の発見」ἡ εὕρησις ἀποδείξεως と定義し、これに合致させる仕方、アリストテレスの論理学書を、いわば演繹的に順序づけている。

論証を発見すること……………論理学の目的
ἡ εὕρησις τῆς ἀποδείξεως

→ 単純な推論の知識……………『分析論』

ἡ τοῦ ἀπλῶς συλλογισμοῦ γνώσις

→

一個の推論を構成する様々な「単純な命題」

……………『命題論』についての考察

ἡ τῶν ἀπλῶν λόγων τῶν συνθέντων τὸν συλλογισμὸν θεωρία

→

単純な命題を生み出す基となる「単純な声」

……………『カテゴリア』を類に応じて捉えること

ἡ κατὰ γῆρας παρὰ τὴν γένη τῶν ἀπλῶν φωνῶν, ἐξ ὧν ὁ ἀπλῶς λόγος ἔχει τὴν γένεσιν

12、一見して明らかなく、ここに現れる順序づけは、後代のいわば矮小化されたアリストテレス主義のそれに繋がるものである。ここでは、彼の論理学書の中で「蓋然的事項について論じる学としての διαλεκτική」について論じられる「トピカ」が無視され、「論証の発見」に至る系列から脱落している⁽²²⁾。

13、かかる仕方アリストテレスの「論理学」λόγικήを『カテゴリア』、『命題論』、『分析論』に限定し、『トピカ』や『詭弁論駁論』をそこから除外するということが、言語に関わる他のアリストテレスの著作——『詩学』、『弁論術』など——をもそこから除外するということが、

Amm. (αὐτῷ) Alexandria のプラトン派に始まることなのか、それとも、先行学派の伝統を受け継ぐものなのかは明白ではない。けれどもわれわれは、Alexandria のプラトン学派の学問研究の性格を考えあわせるならば、ほかならぬここにおいて後代のアリストテレス主義への道が拓かれたということ、ないし少なくとも準備されたということ語り得るのではなからうか。なぜなら、すでに述べられたこと⁽²³⁾、Alexandria のプラトン派では、無味乾燥なまでの体系化・定式化・分類が固定的に行われていたが、このような学問的雰囲気の中では、その体系に合致しないものが廃棄されるということが容易に起こり得ると考えられるからである。つまり、方法的判断中止をもってテキストに臨みそこから体系を引き出してくるのではなく、あらかじめ固定化した枠組みをもってテキストに臨むという態度は、体系に合致しないものの廃棄を容易に結果せしめるのである。

III

14、このようにして、『命題論』が扱う事項が「単純な

命題・文」であることを確定した後、Amm. は次に、「命題・文」λόγος について論じ始める。彼はまず「命題・文」を次の五種類に区分する。⁽²⁴⁾

呼び掛け文 ὁ κλητικὸς λόγος

「おお、至福なるアトレウス」⁽²⁵⁾

命令文 ὁ προτακτικὸς λόγος

「去れ、足の速いイリスよ」⁽²⁶⁾

疑問文 ὁ ἐρωτηματικὸς λόγος

「君はどんな人でどここの出身なのか」⁽²⁷⁾

祈願・希求文 ὁ εὐχτικὸς λόγος

「父なるゼウスよ、よしゝならば……」⁽²⁸⁾

叙述文 ὁ ἀποφαντικὸς λόγος

「神々はすべてを見ておられる」⁽²⁹⁾

「すべて魂は不死である」⁽³⁰⁾

そして、叙述文について、「これはわれわれが様々な事態の内の何かについて叙述する手段となるものである」⁽³¹⁾と語った後、論理学が扱う命題・文 λόγος を「叙述文」に限定し、こう語る。

だがアリストテレスは、この論考として、単純な

命題・文 λόγος についてではなく、むしろ、た

だ叙述文のみについてわれわれに教授している。そしてこれは相応しいことである。なぜなら、様々な命題・文の内ただこの種の命題・文のみが「真」と「偽」を示し得るのであり、様々な論証はこれによって完成するのであり、そして哲学者は論理学の論考すべてを、まさにこの論証をめぐって構成した⁽³²⁾のだからである。

15、ついで彼は、ストア学派の λόγος の区分を紹介し、これを上記五つの λόγος の区分に対応づける。

しかるに、ストアの人々は、「叙述文」を「決議命題」ὁ ἀξιωματικός⁽³³⁾と呼び、「祈願・希求文」を「願望文」ἀρετικόνと呼び、「呼び掛け文」を「語りかけ文」προσκαλορευτικόνと呼び、これらに他の命題・文の種を五つ追加しているが、これらは明らかに、すでに数え上げられたものの幾つかへと還元されるものである。

すなわち、彼らの語るところでは、「誓約文」ἐπιθετικόν もあり（たとえば「さあ、大地をしてこのことを知らしめよ」）、「指定文」ἐπιθετικόν もあ

り（たとえば「この線を直線とせよ」）、「仮定文」ὑποθετικόν もあり（たとえば、「地球を太陽の軌道の中心であると仮定せよ」）、「疑似決議命題」δυσκοινὸν ἀξιωματικός もある（たとえば、「運命は人生に対して何とつれないのだろうか」）のであるが、これらはすべて偽および真を示すものであるがゆえに、叙述文の下に帰着しよう。すなわち、「誓約文」は神の証言によって冗長化した叙述文であり、「疑似決議命題」は「何と」という感嘆の副詞を付加することによって冗長化した叙述文なのである。

そして彼らは、これらに加えて第五のもの「疑念文」ἐπιπροσητικόν がある（たとえば、「ダオスはここにいて、一体何を伝えようとしているのだろう」と語っているが、これは、語り手が疑問の動機を付加していることを除けば、明らかに疑問文と同じものになるのである⁽³⁴⁾。

ここに論じられたことがらを、次章で述べられる仮定文に関する事項をも加えて表の形で表せば表—1のようだろう。

16、ここに掲げられるストアの λόγος の区分は、スト

アの人々が「完全なレクトン」*λεκτόν αὐτορέτες*として掲げているものである。D.L. VII.63では、レクトンが次のように定義される。

彼らが「レクトン」と呼ぶのは理性的表象に即して存立するものごとである。そしてストア派の人々は、レクトンには完全なものと不完全なものとがあると語っている。不完全なレクトンとは、その表現が完結していないものごとであり、「書く」がこれに該当する。なぜなら、われわれは「誰が」とたずねるからである。また完全なレクトンとは、その表現が完結しているものごとであり、「ソクラテスは書く」がこれに該当する。⁽³⁵⁾

そしてこれに続く箇所 (D.L. VII.63,65-68) で、「完全なレクトン」の実例として、「決議命題」*ἀξιώματα* (65)、「疑問」*ἐρωτήματα* (66: 諾否を求めるだけの疑問)、「尋問」*ρῶματα* (66: 諾否では答えられない疑問)、「命令」*προστακτικόν* (67)、「誓ふ」*ὄρκικόν* (67)、「嘆願」*ἀπαρτικόν* (66)、「仮定」*ὑποθετικόν* (66)、「呼ぶ掛す」*προσαγορευτικόν* (67)、「疑似決議命題」*ὅμοιον ἀξιώματι* (67)、「疑念文」*ἐπαρηρητικόν* (68)、「推論」

οὐλόγοιται (64) が掲げられている。

17' その中 Amm. が掲げているストアの *λόγος* の区分と D.L. VII の「完全なレクトン」の実例とを比較してみると、Amm. の区分の中には D.L. VII に現れる *ρῶματα* と *ὄρκικόν* とが欠けている。また Amm. が掲げている一覧の中では、*ἐχθερικόν* が D.L. VII にはない。だが Amm. が少し後の箇所 (p.5.10) で "*ρῶματικὸς λόγος*" という語を使っていること、*ὄρκικόν* は内容的に *ὄμορικόν* と内容的に重複することを考えあわせること、この中 Amm. が言及しているものがほぼ D.L. V II に現れる「完全なレクトン」に対応すると考えてよいであろう。つまりこの Amm. は、ストアの人々が掲げる十個に及ぶ完全なレクトンを敢えて掲げ、これらを自らの掲げる五つの *λόγος* と対応づけ、これらへと還元しているのである。

18' ストアの人々が語る「誓約文」*ὄμορικόν*、「指定文」*ἐχθερικόν*、「仮定文」*ὑποθετικόν*、「疑似決議命題」*ὅμοιον ἀξιώματι* を含む「叙述文」*ἀρροφαντικὸς λόγος* へと還元するところ、また「疑念文」*ἐπαρηρητικόν* を「疑問文」*ἐρωτητικὸς λόγος* と同一視する

ということ—かかる Amm. の態度の根底には、レクトンの存在を否定する彼の根本的立場がある。³⁶⁾つまり彼は、レクトンを否定する立場から、ストアの言語理論のもつある種豊かな可能性を論理学の方向へと狭めて行ったとも考えられるのである。D.M.Schenkeveld は、Amm. の語る五つの λόγος の歴史的起源とストアの語る λειπὸν αὐτοῦ εἶδος 彼はそれを十個とみなす—との関係について論じ、こう語っている。

1、ストアのレクトンは、言葉・命題の持つ様々な「発語としての力」(illocutionary force) を表現するものであった。

2、だがペリパトス派は、レクトンが有する事態・行為としての資格 status を否定した。

3、その結果、ペリパトスの伝統の中で、ストアの「完全なレクトン」を五つの λόγος と同一視するといふ事態が生じて来た。³⁷⁾

IV

19、このようにして、論理学の扱う命題・文 λόγος を

「叙述文」ἀρογαυτικός λόγος に限定した後、彼は「叙述文」を「定言文」κατηγοριακός λόγος と「假言文」ὕποθετικός λόγος とに区分する。そして定言文を

「何かが無かかに帰属するか、帰属しないか」を表示するもの

τὸ σημαῖνον τί τίνι ὑπάρχει ἢ οὐκ ὑπάρχει

と定義し、假言文を

「何かがある場合に何かがある・ない」という

ことを、あるいは「何かがある場合でない場合に、何かがある・ない」ということを表示するもの

τὸ σημαῖνον τίνος ὄντος τί ἔστιν ἢ οὐκ ἔστιν,

ἢ τίνος μὴ ὄντος τί ἔστιν ἢ οὐκ ἔστιν

と定義する。そして、論理学において第一義的に扱われる命題・文 λόγος が定言文であることを主張してこう述べる。

そこでアリストテレスは、叙述文の内、ただ定言文の種のみを「完全なもの」αὐτοτελές、³⁸⁾「論証に有益なもの」としてわれわれに提示している。そして假言文については、これを「不完全なもの」ἐλάττωές、³⁹⁾「定言による完成を全く欠くもの」と

して、第一義的関心事とは決してみなしていないのである。⁽³⁸⁾

20、このテキストでわれわれが目しななければならないのは、“*αὐτοτελής - ἐλάτεις*” という用語であろう。つまり Amm. は、ストアにおいて「レクトンの完全性・不完全性」を語るに際して用いられる用語を「叙述命題の完全性・不完全性」へと転移させて用いているのである。“*αὐτοτελής - ἐλάτεις*” という用語が、専門用語だったのか、それとも一般的用語だったのかは明確ではないが、ストアの人々にとっては、かかる用語法が挑戦的なものであったことは想像するに難くない。なぜなら、ここで Amm. は、敢えてストアの人々と同じ用語を用いて、彼らが「完全なレクトン」とみなしていた假言文を「不完全なもの」と主張しているのだからである。

21、これに続く箇所 (p.3.19ff.) では、「定言三段論法」*κατηγορηκὸς συλλογισμὸς*⁽³⁹⁾ と「假言三段論法」*ὑποθετικὸς συλλογισμὸς*⁽⁴⁰⁾ とが比較され、およそ論証 *ἀπόδειξις* のためには假言三段論法のみでは不十分なのであって定言三段論法が必須であることが、いわゆる無

限遡行の論理で示される。

1、假言三段論法は代置や付加条件を論証なしに受け入れている。⁽⁴¹⁾

2、そこで、これらの諸假定を論証するために他の假言三段論法を用いるなら、そこで前提されている諸假定を論証するためにさらに別の假言三段論法が必要となり、これが無限に続いて行くことになる。

3、したがって、論証を完全な仕方で行うためには、定言三段論法が必要である。

22、先の “*αὐτοτελής - ἐλάτεις*” の用語法などと併せて考えると、この議論もまたストアの言語理論を念頭に置いていると考えられよう。このことは、この箇所では命題の前件を現す語として「代置」および「付加条件」が用いられていることから窺える。アリストテレス論理学の用語である「代置」が「付加条件」というストア的用語で言い換えられているからである。⁽⁴²⁾

いずれにせよ Amm. は、この箇所では、論理学において中心的に扱われる命題・*ἐπιπέδιον* が、叙述命題であり、しかも叙述命題の内の定言命題であることを、ストアの言

語理論を念頭に置きつつ示したのである。

V

23、このようにして Amm. は、論理学 *λογική* において扱われる命題・文 *λόγος* を定言命題に限定した。そこで彼は次に、その根拠を「靈魂論」の観点から説明して行く (p.4.27ff.)⁽⁴³⁾。

24、われわれの魂は二つの能力を持っている。その第一は、「認識能力」 *δυνάμεις γνωστικαί* であり、これは「われわれがそれに即して個々の存在者を認識するもの」 *καθ' ἃς γιννώσκουμεν ἕκαστον τῶν ὄντων* と定義される。「知性」 *νοῦς*、⁽⁴⁴⁾「思惟」 *διάνοια*、⁽⁴⁵⁾「思いなし」 *δόξα*、⁽⁴⁶⁾「表象」 *φαντασία*、⁽⁴⁷⁾「感覚」 *αἴσθησις* などがこれに属する。第二の能力は、「欲求能力」 *δυνάμεις ὀρεστικαί* であり、これは「われわれがこれに即して様々な善を欲求するもの」 *καθ' ἃς ὀρεγόμεθα τῶν ἀγαθῶν* と定義される。これに属するのは、「欲求」 *βούλησις*、⁽⁴⁸⁾「選択能力」 *προαίρεσις*、⁽⁴⁹⁾「傾向性」 *θυμὸν*、⁽⁵⁰⁾「欲望」 *ἐπιθυμία* などである。

25、魂が欲求能力を働かせる場合、魂は、それ自体として働くのではなく、欲求能力を完成する *τελεῖν* ためにふさわしいと思われる他者に向かって自らを広げて行くが、その際魂が向かう対象 (i.e. 善) には二つの場合がある。その第一は、「魂が何らかの「実在するもの」 *τὰ ὄντα*, *τὰ ἔργα* に向かって行く場合であり、これに属する場合は、魂が、他の人々の「考えたこと」 *τὰ δοκούντα* に向かって行く場合であり、これは具体的には、他者からの「ことば」 *λόγος* を求めるといふ形で実現される。

26、様々な「命題・文」 *λόγος* の内で、「叙述文」以外の「命題・文」はすべて欲求能力に由来する。すなわち、
1、⁽⁵¹⁾「疑問文」 *ἐρωτηματικός λόγος* (諾否で答えること) が可能な疑問文)、および「質問文」 *τυφηματικός λόγος* (諾否で答えることが不可能な疑問文) は、他者からの「ことば」 *λόγος* を求める際に発せられる。

2、⁽⁵²⁾「呼び掛け文」 *κλητικός λόγος* は、他者(呼び掛けの相手 *πρὸς ὃν λέγεται*) そのものを求める際に発

せられる。

3. 「祈願文」 αὐτικός λόγος は、他者の行為を求め
る場合で、その他者が発語者よりも目上のものである
場合に発せられる。

4. 「命令文」 προστακτικός λόγος は、他者の行為を
求める場合で、その他者が発語者よりも目下のもので
ある場合に発せられる。

そしてただ「叙述文」 ἀποφαντικός λόγος のみが、認識
能力に由来する。つまり、叙述文とは、われわれの内で起
こる「真なることがら」や「真らしきことがら」の認識を
外部に伝達するもの ἐξωτερικὸν τῆς γεινομένης ἐν
ὑμῖν γνώσεως τῶν πραγμάτων ἀληθῶς ἢ φαινομένου
(p.5.18f.) に他ならないのである。(以上述べられたこと
を表の形で現せば、表—2 のようになる。)

27. アリストテレスが本書を『ペリ・ヘルメネイアス』
Περὶ ἑρμηνείας と名づけた根拠はここに存在する。つまり
彼は、様々な命題・文 λόγος の中で、ただ叙述文のみを
「魂の認識を表現するもの」 ἐρμηνεύον τὴν γνώσιν τῆς
ψυχῆς (p.5.18f.) と考えたので、そのことを表現するた
めに本書をこのように名づけたのである。したがって、

『ペリ・ヘルメネイアス』という表題は「叙述文について」
Περὶ τῶ ἀποφαντικοῦ λόγου と対等であることとなる。⁽⁴⁵⁾

まとめ

28. このようにして、Amm. は、『命題論』をアリスト
テレス論理学書の中で位置づけ、「命題・文」 λόγος の種
類を区分し、論理学 λογική において扱われる命題・文
λόγος を「叙述文」 ἀποφαντικός λόγος 中の「定
言文」 κατηγορητικός λόγος に限定し、その根拠を靈魂論
の観点から示した。その議論において終始念頭に置かれて
いたのは、ストアの言語理論—これは彼らの学問区分の内
の διαλεκτική において扱われる—であった。

29. そこで、われわれは最後に、Amm. において論じ
られた「論理学」 λογική の性格をストアの「弁証法」
διαλεκτική と比較することによって、Amm. 論理学の
性格について、とりあえずの見通しを得ておきたい。さし
あたりわれわれは、D.L. VII にあらわれる三つの定義を
手掛かりにすることにしよう。

1. 一問一答の形でなされる議論において正しく対話す

επισημνῶν τὸν ἀληθῆ καὶ ψευδῆ λόγον

ἐπισημνῶν τοῦ ὁρθῆς διαλέγεσθαι περὶ τῶν ἐν
ἐρωτησέαι καὶ ἀποκρίσει λόγων (D.L. VII. 42)

2、真と偽、および真でも偽でもないものについての知識

ἐπισημνῶν ἀληθῶν καὶ ψευδῶν καὶ οὐδ' ἑτέρων
(Poseidonios, D.L. VII. 62)

3、指し示すものと指し示されるものに関する知識
ἐπισημνῶν περὶ σημαίνοντα καὶ σημαίνόμενα

(Chrysippos, D.L. VII. 62)

30、これらは、弁証法とは何かについての定義であるが、
ここでわれわれは、二つの事項に注目しておきたい。

1、ストアの弁証法においては、「問い、答える」とい
う問答形式での議論が念頭に置かれていること

2、ストアの弁証法においては、「真なる事柄」の知識、
「偽なる事項」の知識のみでなく、「真でも偽でもない
事項」の知識もまた扱われること

31、かかるストアの弁証法の性格に対して、Amm. の
語る論理学は次のような性格をもっている。

1、論理学においては、「疑問文」(ἐρωτηματικῶς

λόγος および ρωματικῶς λόγος) は「欲求能力
に由来するもの」として原理的に排除される。したがっ
て、問答形式なるものは、第一義的には問題とはなら
ない。

2、論理学においては、叙述文以外の「疑問文」、「呼び
掛け文」、「祈願文」、「命令文」などによって表現され
る「真でも偽でもない事項」(i.e. ストアにおいて「完
全なレクトン」とされるもの) は問題とはならない。

(cf. 18節)

われわれは、ストアの弁証法から Amm. の論理学への
このような移行の姿を目の当たりにするとき、古代言語理
論のある種の「瘦せ細り」を感じないであろうか。

註

- (1) アレクサンドリア学派は、アテナイのプラトン学派の学頭
Syrianos (431/2~) のアレクサンドリア滞在時にその基礎
が据えられた。この学派に属する著作家としては、Athenai
の Putarchos (~431/32) の弟子 Hierokles (5c.)、
Syrianos の下で学んだ Hermias (5c.)、その息子 Ammo-
nios Hermieou (435/45~517/26)、Asclepios (6c.)、

Olympiodoros (495/505～565以降) アルメニア出身のキリスト教徒 David (6c.) からなる。

(2) 二～四節参照。

(3) アテナイのアカデメイアが Justinianus 帝によって閉鎖されたのは五二九年。アレクサンドリアのプラトン派がアラビア人のアレクサンドリア侵攻によって滅亡するのは六四一年である。

(4) アルメニア出身のキリスト教徒 David (6c.) 自身の学派の出身である。彼は『Aristoteles Categoria 註解』『哲学へのプロロコメナ』 Porphyrios Isagoge 註解などを執筆した。

(5) 彼は、父 Hermias の後を継ぐためにアテナイに留学し、プロトロスのもよびをひき、四一〇頃 Alexandria に戻り、生涯 Alexandria に留まり、Simplicios, Damascios, Philoponos (c.490～570sq.) など紀元六世紀の多くのプラトニ主義者を育てた。彼の著作として、Porphyrios, Isagoge 註解、Aristoteles, De Interpretatione 註解、Aristoteles, Analytica Priora 註解、Aristoteles, Categoria 註解が知られている。

(6) 底本として、Commentaria in Aristotelem Graeca,

Vol. IV, pars V, Ammonius De Interpretatione, Beroilini MCCCLXXXVII (公巻 [G] の略記) を用いる。また Guil-

laume de Moerbeke のラテン語 Commentaire sur le Peri Hermeneias d'Aristote, Traduction de Guillaume de Moerbeke, Corpus Latinum Commentariorum in Aristo-

talem Graecorum, Édition critique et Étude sur l'utilisation du Commentaire dans L'oeuvre de Saint Thomas. Universitaires de Louvain, Louvain/Béatrice-Nauwelaerts, Paris, 1961 (以降 [L] の略記) を参照した。また、David Blank の英訳、Ammonius, On Aristotle's On Interpretation 1-8, Cornell University Press, Ithaca, New York, 1996 (以降 [E] と略記) より多くを学んだ。なお、以下の註においては、[G] のテキストの単純な引用は、紙面節約のため、特に必要な箇所を除いて省略した。

(7) Ammoios, ΠΡΟΛΕΓΟΜΕΝΑ ΤΩΝ ΔΕΚΑΚΑΘ' ὈΠΙΣΘ ΑΠΟ ΦΩΝΙΤΩ ΑΜΜΟΝΙΟΥ ΦΙΛΟΣΟΦΟΥ (CAG, Vol. IV, Pars IV) に収録。以下 [C] と略記) は、彼の直接の筆になるものではなく、彼の講義を聴講した学生のノートに基づいてのものであると言われている。([E] p.2.) もしやうであるならば、この著作はなおから、アレクサンドリアのプラトン派の雰囲気を生き生きと伝えてくれると言えるだろう。

う。

(8) [C] p.1.3-12

(9) [C] p.1.13-3.19

(10) [G] p.112f. $\tau\alpha\ \sigma\upsilon\nu\tau\alpha\gamma\mu\alpha\tau\iota\kappa\omega\upsilon\ \tau\epsilon\lambda\epsilon\iota\ \tau\epsilon\ \kappa\alpha\iota\ \epsilon\pi\eta\mu\eta\tau\iota\alpha\varsigma\ \kappa\alpha\lambda\lambda\epsilon\iota$
この次節を参照のこと。

(11) [G] p.112-21.

(12) [C] p.715f. 上記十個の問題の第九番目の中でこれらが列挙されている。

(13) [E] n.3 $\tau\epsilon\ \text{オリゲネスの『雅歌講解』の序文を Alexandria の文藝字の方法論への関連で扱った研究として}$ B.Neuschäfer, *Origenes als Philologe*, Basel, 1987, 58-84; 365-69, J.Mansfeld, *Prolegomena: Questions to be settled before the Study of an Author or a Text*, Leiden 1994 を掲げている。

(14) [C] p.320-4.17. 上記十個の問題の第二問題への議論を掲げている。

(15) [C] p.46-13. $\iota\sigma\tau\epsilon\omicron\nu\ \gamma\acute{\alpha}\rho\ \delta\tau\iota\ \tau\omicron\ \pi\alpha\lambda\alpha\iota\omicron\nu\ \epsilon\iota\ \tau\iota\varsigma\ \pi\omicron\sigma\tau\eta\eta\tau\omicron\ \sigma\upsilon\gamma\gamma\acute{\rho}\alpha\mu\alpha\tau\alpha\ \tau\alpha\ \epsilon\upsilon\pi\iota\sigma\tau\omicron\chi\omicron\mu\epsilon\upsilon\alpha\ \kappa\alpha\tau\alpha\ \mu\acute{\epsilon}\rho\omicron\varsigma\ \alpha\upsilon\tau\omicron\iota\varsigma\ \epsilon\iota\varsigma\ \tau\eta\eta\ \tau\omicron\upsilon\ \pi\omicron\kappa\omicron\upsilon\epsilon\mu\acute{\epsilon}\nu\omicron\upsilon\ \acute{\alpha}\pi\omicron\delta\epsilon\iota\chi\iota\nu\ \sigma\upsilon\mu\beta\alpha\lambda\lambda\acute{\omicron}\mu\epsilon\upsilon\alpha\ \kappa\epsilon\phi\alpha\lambda\alpha\iota\omega\delta\omicron\varsigma\ \acute{\alpha}\pi\epsilon\pi\gamma\acute{\rho}\alpha\phi\omicron\nu\tau\omicron\ \kappa\alpha\iota\ \delta\epsilon\ \epsilon\zeta\ \acute{\alpha}\rho\chi\alpha\iota\omicron\tau\epsilon\phi\omega\nu\ \beta\iota\beta\lambda\iota\omega\nu\ \nu\omicron\tau\eta\mu\alpha\tau\alpha\ \acute{\epsilon}\lambda\acute{\alpha}\mu\beta\alpha\nu\omicron\nu\ \iota\tilde{\nu}\alpha\ \tau\alpha\ \mu\acute{\epsilon}\n\ \delta\theta\epsilon\omega\varsigma\ \acute{\epsilon}\chi\omicron\nu\tau\alpha\ \kappa\alpha\tau\alpha\ \nu\omicron\tau\eta\ \tau\alpha\ \delta\epsilon\ \mu\eta\ \omicron\upsilon\tau\omega\varsigma\ \acute{\epsilon}\xi\epsilon\lambda\epsilon\gamma\acute{\epsilon}\omega\sigma\alpha\nu\ \acute{\upsilon}\sigma\tau\epsilon\pi\omicron\nu\ \mu\acute{\epsilon}\n\tau\omicron\iota\ \tau\acute{\alpha}\xi\iota\nu\ \tau\epsilon\ \tau\iota\nu\alpha\ \alpha\upsilon\tau\omicron\iota\varsigma\ \acute{\epsilon}\tau\upsilon\pi\omicron\sigma\theta\acute{\epsilon}\n\tau\epsilon\varsigma\ \kappa\alpha\iota\ \kappa\alpha\lambda\lambda\epsilon\iota\ \lambda\acute{\omicron}\gamma\omega\nu\ \kappa\alpha\iota\ \acute{\alpha}\nu\alpha\gamma\gamma\epsilon\lambda\iota\alpha\varsigma\ \acute{\alpha}\nu\alpha\kappa\eta\sigma\epsilon\iota\ \varphi\alpha\iota\delta\upsilon\beta\omicron\nu\alpha\tau\epsilon\varsigma\ \acute{\upsilon}\phi\alpha\iota\nu\ \tau\alpha\ \sigma\upsilon\gamma\gamma\acute{\rho}\alpha\mu\alpha\tau\alpha\ \kappa\alpha\iota\ \tau\alpha\upsilon\tau\eta\ \delta\iota\epsilon\nu\acute{\eta}\nu\omicron\chi\epsilon\ \tau\alpha\ \acute{\upsilon}\pi\omicron\tau\eta\mu\alpha\tau\iota\kappa\acute{\alpha}$

$\tau\omega\nu\ \sigma\upsilon\nu\tau\alpha\gamma\mu\alpha\tau\iota\kappa\omega\nu\ \tau\epsilon\lambda\epsilon\iota\ \tau\epsilon\ \kappa\alpha\iota\ \epsilon\pi\eta\mu\eta\tau\iota\alpha\varsigma\ \kappa\alpha\lambda\lambda\epsilon\iota$.
この節で $\epsilon\pi\eta\mu\eta\tau\iota\alpha\varsigma$ を「表現」と訳したことの根拠について
[G] p.427-5.23 を参照。この箇所は Amm. は著作の表題となつてゐる $\epsilon\pi\eta\mu\eta\tau\iota\alpha$ とする語の意味について論じてこれを「われわれの内へ起る真なることながらや真らしいことが心を表現するもの $\acute{\epsilon}\xi\alpha\gamma\gamma\epsilon\lambda\alpha\tau\iota\kappa\omega\nu$ 」(p.415f.) とする語をもつて説明している。また二十七節を参照。

(16) 前掲四節を参照。

(17) [E] pp.2f. $\tau\epsilon\ \text{『命題論』註解の成立経過を説明するた}$ めに、マリノス『プロクロス伝』c.12 を引用している。その箇所では、プロクロスの師ブルタルコスがプロクロスと共にアリストテレス『靈魂論』とプラトン『バイドン』を読んだ後、プロクロスに『バイドン』註解を書くことを奨めたことが次のように語られている。

- 1' 師ブルタルコスが語ることをノート $\sigma\chi\omicron\lambda\iota\alpha$ に書き記す
- 2' ノート $\sigma\chi\omicron\lambda\iota\alpha$ がプロクロスによつて追補される $\sigma\upsilon\mu\pi\lambda\epsilon\omega\theta\acute{\epsilon}\nu\tau\alpha\ \tau\alpha\ \acute{\alpha}\nu$
- 3' それはプロクロスの名前を冠した「覚え書き」 $\acute{\upsilon}\pi\omicron\tau\eta\mu\alpha\tau\alpha\ \tau\alpha\ \acute{\alpha}\nu$
- 4' その一回覧されるものとなる

そして、Amm. も、『命題論』註解』を執筆する際にはほぼ同様のことを行ったのであろう、と推測している。この推測は、『カテゴリア』註解』の序論での「覚え書き」に関する説明によってかなりの程度実証されるであらう。

(18) 「語られたことがその解明に通常先立つ五つの主題」(前置) が列挙された直後の箇所である。

(19) 「単純な声」 *ἐπιτη φωνή* 単語のことである。

(20) 適当な訳語がないので、*λόγος* と *πρότασις* の双方を「命題」と訳したが、*λόγος* は「文」「ことば」などを広く示す語である。*λόγος* が主に『カテゴリア』や『命題論』で用いられるのに対して、*πρότασις* は、主に『分析論』で用いられる、と語られている。¹⁾ [G] p.414ff. 「かかるに、彼は『分析論』においては、これら (i.e. *λόγος*) を推論の部分、また同時に前提と考えて、探求に値するものとなすことになるが、これも当然のことであらう。なぜなら、古人々々は、これらを命題 *πρότασις* と名付けたが、それは、これらが何かを推論したいと望む人々によって、言論の相手のために措定されたもの *προετιθεσθαι* だからである。」

(21) [G] p.121-29.

(22) [G] の引用箇所索引では、『エウカ』の引用は僅か2カ所のみである。p.202.1. (Top. 159a 16), p.254.20f. (Top. 100a 21)

(23) 第二―四節を参照。

(24) [E] p.136. n.7 は、この *λόγος* の区分が紀元五世紀以前に遡る、という主張を研究 D. M. Schenkenfeld, 'Stoic and Peripatetic kinds of speech act and the distinction of grammatical moods, *Mnemosyne* 37, 1984, 291-353 を紹介している。

(25) *Iliad.* 3.182 etc.

(26) *Iliad.* 8.399 etc.

(27) *Odyssey.* 7.238.

(28) *Iliad.* 4.288.

(29) *Odyssey.* 4.379.

(30) *Plato, Phaidros.* 245c4.

(31) p.218. καθ' ὃν ἀποδεικνύμεθα περὶ ὄρουσῶν τῶν πραγματικῶν

(32) p.221-25. οὐ περὶ παντός ἐπιλοῦ λόγου κατὰ τῆδε τὴν πραγματείαν διδόνκει ἡμᾶς ὁ Ἀριστοτέλης, ἀλλὰ περὶ μόνου τοῦ ἀποδεικτικού. καὶ τοῦτο εἰκότως· μόνον γὰρ τοῦτο τὸ εἶδος τοῦ λόγου δεκτικὸν εἶσθαι ἀληθείας τε καὶ ψεύδους καὶ ὅμο τοῦτο τελούσιν αἱ ἀποδείξεις, ὅτε ὅν ἡ λογικὴ πᾶσα πραγματεία τῶν φιλοσοφῶν συντέτακται.

(33) ἀξίωμα は、幾何学では「公理」に該当する語で、通常

- 「命題」と訳られるが、λόγος や πρότασις と訳し分けるた
るに、誤った。"that of which one is thought
worthy", "that which is thought fit", "a decision"
(Liddel-Scott) τὸ ἐπιλογιστικόν τὸ ἐπιλογιστικόν
(34) p.226-3.6.
- (35) φασὶ δὲ [τὸ] λεκτὸν εἶναι τὸ κατὰ φαντασίαν λογικὴν
ὑφιστάμενον. τῶν δὲ λεκτῶν τὰ μὲν λέγουσιν εἶναι
αὐτολελήθιοι Στωικοί, τὰ δ' ἐλλαντῆ. ἐλλαντῆ μὲν οὖν ἔστι
τὰ ἀναπόριστον ἔχοντα τὴν ἐποφάν, οἷον [πάσαι
ἐπιζητούμεν ῥαφ. Τις; αὐτολελήθ' ὅ' ἐστὶ τὰ ἀπρηριστικὴν
ἔχοντα τὴν ἐποφάν, οἷον [πάσαι
ἡμῶν "τὸ κατὰ φαντασίαν λογικὴν ὑφιστάμενον"
を如何に理解するかが 大問題であるが、こゝではレク-ton
の議論の詳細には立ち入らな。]
- (36) Αμμ. は、ストアの語レク-tonを、φάσματα - νόημα
(= ἐν τῇ ψυχῇ πρόημα) - φωνή - ῥεσμία の系列の中
に φάσματα への νόημα への間に位置するものと考え、これ
の存在を否定してゐる。[G] p.17.28.
- (37) D.M.Schenkenfeld, op.cit. p.324ff. ただし筆者はこの論
文を直接参照することができなかった。引用は [E] p.136.
n.14 に拠つてゐる。
- (38) [G] p.315-19.

- (39) こゝにいわれる仮言三段論法とは、条件文 πρόσημις を
用いた推論、選言文 συνειρημένον を用いた推論の双方を含
む。
- (40) 代置 μετάληψις。命題 p を論証するために、「もし p なら
ば、p である」という条件命題を定立するならば、p の代り
こゝを論証すればよ。この p を代置と呼ぶ。cf. An.Pr.45
b17.
- (41) 付加条件 πρόσληψις。「もし p ならば、p である」を用
つて論証を行う場合、「もし p ならば」という小前提がこれに付加
されるならば、「ゆえに p である」という三段論法が成立する。
この場合の p が「付加条件」と呼ばれる。したがってこれは
代置と同じのである。DL.VII.76.
- (42) Bonitz の Index にある πρόσληψις という名詞形が用
いられてゐるのは An. Pr. 58b9 の一カ所のみであるが、こ
こでの用語法は、「付加条件・小前提」の意味ではな。
- (43) 以下の議論は、De Anima 3.10 (433a9ff.), Ethica Ni-
chomachea 6.2 (1138a13ff.) などによ來するものである。
- (44) これ以外に、何らかの物体を求めたりする場合も当然こゝ
に包含されるであろうが、こゝでは言葉との関連で欲求能力
が論じられてゐるために、これらについては触れられてゐない。
- (45) [G] p.22f.

表-1 文 (λόγοι) の五つの種類

Ammonios		Stoa (Amm. が掲げるもの)
ὁ κλητικὸς λόγος vocativa oratio 「おお、至福なるアトレウス」		προσαγορευτικόν appellativum
ὁ προστακτικὸς λόγος imperative oratio 「去れ、足の速いイリスよ」		(προστακτικόν)
ὁ ἐρωτικὸς λόγος interrogative oratio 「君はどんな人でどこの出身なのか」		(ἐρωτικόν)
		ἐπαπορητικόν dubitativum 「ダオスがここにいるが、一体何を伝えようとしているのだろうか」
ὁ εὐχτικὸς λόγος optativa oratio 「父なるゼウスよ、よし~ならば...」		ἀρατικόν araticum
ὁ ἀποφαντικὸς λόγος enuntiativa oratio 「神々はすべてを見ておられる」 「すべて魂は不死である」	κατηγορικὸς categorica = αὐτοτελέες utilis	ἀξιῶμα axioma
		ὁμοτικόν iurativa 「さあ、大地をしてこのことを知らしめよ」
		ἐκθετικόν expositiva 「この線を直線とせよ」
	ὁμοιον ἀξιῶματι simile axiomati 「運命は人生に対して何とつれないのだろうか」	
	ὑποθετικὸς hypothitica = ἐλλιπές defectiva	ὑποθετικόν suppositiva 「地球を太陽の軌道の中心であると仮定せよ」

* ラテン訳は、Guillaume de Moerbeke による。

表-2 魂の二つの能力と文の区分

cf. De Anima 3.10(433a9), Ethica Nichomachia 6.2 (1138a18ff.)

	δύναμις 能力		实例	定義	δύναμις 能力	实例	δύναμις 文	対象	实例
	定義	实例							
δυνάμεις γνώστικαί virtutes cognitivae 認識能力	δύναμις καθ' ἑαυτὴν γνώστικαί ἐκαστον τῶν ὄντων virtutes, secundum quas cognoscimus entium unumquodque	νοῦς	ἔξαιρητικὸν τῆς γενουμένης ἐν ἡμῖν γνώσεως τῶν πραγματικῶν ἀληθειῶν ἢ φαντασιῶν	τῆς ψυχῆς οὐκ αὐτῆς καθ' ἑαυτὴν ἐνεργωσῆς, ἀλλὰ πρὸς ἕτερον δραστηριότητος (virtus) non ipsa secundum se ipsam operans, sed ad alterum extendens	ἐπιθυμία concupiscentia	ἐπιθυμία concupiscentia	τῆς ψυχῆς οὐκ αὐτῆς καθ' ἑαυτὴν ἐνεργωσῆς, ἀλλὰ πρὸς ἕτερον δραστηριότητος (virtus) non ipsa secundum se ipsam operans, sed ad alterum extendens	自己自身	ἔξαιρητικὸς enuntiativa 叙述文
		διάνοια	expressiva cognitionis rerum in nobis factae vere aut apparenter						
		ratiocinatio							
		δόξα opinio							
δυνάμεις ζωτικαί / ὁρετικαί virtutes appetitivae 欲求能力	δύναμις καθ' ἑαυτὴν τῶν ἀγαθῶν ἢ τῶν ὄντων ἢ τῶν βλαπτικῶν virtutes, secundum quas appetimus bona, aut ex- istentia aut apparentia	βούλησις voluntas	ἐπιθυμία concupiscentia	τῆς ψυχῆς οὐκ αὐτῆς καθ' ἑαυτὴν ἐνεργωσῆς, ἀλλὰ πρὸς ἕτερον δραστηριότητος (virtus) non ipsa secundum se ipsam operans, sed ad alterum extendens	ἐπιθυμία concupiscentia	ἐπιθυμία concupiscentia	τῆς ψυχῆς οὐκ αὐτῆς καθ' ἑαυτὴν ἐνεργωσῆς, ἀλλὰ πρὸς ἕτερον δραστηριότητος (virtus) non ipsa secundum se ipsam operans, sed ad alterum extendens	自己自身	ἔξαιρητικὸς enuntiativa 叙述文
		προαίρεσις electio	ἐπιθυμία concupiscentia						
		θυμὸν ira	ἐπιθυμία concupiscentia						
		ἐπιθυμία concupiscentia	ἐπιθυμία concupiscentia						

* ラテン語は、Guillaume de Moerbeke による。

Ⅱ 討論 Ⅱ

加藤 信朗

大変精緻な研究で、アウグスティヌスとポエティウスの間という、先生のご関心の中での一つの問題点について、示唆に富むことがらが提示されたように思う。とりわけ新プラトン派の広がり、アレクサンドリアで展開された新プラトン派のあり方という問題、およびそれまで主流派であったかも知れないストア派との対峙がいかなるものであったのか、従ってそれは当然、その後ポエティウスに至るまでの展開、言葉に関する関わりを展開における問題について、示唆に富む問題提示をうかがえた。アリストテレスに関して、またアウグスティヌスやストア派に関しても、それぞれに造詣の深い方々がいらっしやるので、これからそれぞれの問題点に関して議論して頂きたい。

最初に一言だけ。アウグスティヌスの問題に引き戻した際に、アウグスティヌスの言葉が展開してゆく場所、それ

は探究の言葉とまとめられるとして、それは古代教養・ギリシア哲学によって準備されたものであるとは言える。だがそれだけではなく、新しく出発したものがあろう。そのアウグスティヌスの言葉が展開してゆく中で、探究のロジックと言えるようなものが、むしろ『命題論』がアンモニオスによって確定されてゆくような方向ではないものとしてあったのではなからうか。

それに関係することで、確かにアレクサンドリアにおける新プラトン主義のアリストテレス注解がある形をもっていたとは思うが、大雑把な話として、中世に伝えられる *trivium-quadrivium* という学問研究の構造 (Marron の教育史程度の知識であるが) は、ほぼヘレニズム時代に *enkyklios paideia* という形でアカデメイアで準備されたものだと思われるが、そういうかたちで教養人の間に、*artes liberales* という形で一般化されていったものが基礎であったと了解している。その *artes liberales* の *trivium-quadrivium* という教養の構造というものは、ペリパトス派の影響の強いアリストテレス注釈の中で壊されていったのだらうか、どの程度まで残っていたのだらうか、という点が気になる。これはアウグスティヌスの方から来

ると、キケロの影響が強かったと思われるが、キケロはアテナイに留学しているときに、アカデメイア派の懷疑論から離れた先生（アスカロンのアンテオコス）についていたため、結局ストア派とアカデメイア派を包含するような立場に立っていただろうと思われる。おそらくアウグスティヌスの流れはその流れから来ていると言えるだろう。そういう種類のアカデメイア派が新プラトン派によって乗っ取られるというか、そのときに変貌が起こってしまつて、上級三分科が持っていた働き、*grammatica*, *rhetorica*, *dialectica* という構造が破壊されたのかどうか、が気になる。ポエティウスは確かにアリストテレスの解釈の正統に立ったのだと言えようが、カロリング朝の時代になるとやはり *trivium-quadrivium* が教養体系の基礎になつて *dialectica* が始まつてゆく。

アリストテレスの著作の中で、『命題論』は場所として『カテゴリア論』と『分析論』の間に置かれている。この順序は私たちが親しんでいる、論理学 (*logica*) のひとつの類落形態に一致するものであり、概念論—判断論—推理論という近代哲学の基礎となつた論理学の枠組みと同じである。そこからは『トピカ』が抜け落ちてゐる。アンド

ロニコスが編集した時、『トピカ』は加えられているのだが、『オルガノン』の枠組みの中で、『トピカ』のもつ位置は明確ではない。また、そこでは、同じように言葉にかかわる研究である（また実際に『トピカ』や『分析論』との関連を意識して書かれている）『レトリカ』は「オルガノン」の一群からは切り離され、政治学にかかわるものとして『ポリティカ』の後に配されている。これはアンドロニコスの手になる *Corpus Aristotelicum* では *trivium* の構造がすでに壊れているということである。新プラトン派のアリストテレス哲学研究はアンドロニコスの編集した *Corpus Aristotelicum* に依拠していると思われるが、そのなかでアカデメイアの伝統にもとづく *trivium-quadrivium* という古代バイデシアの全体的な構造がまだ保たれていたのか、それともすでに壊れていたのかということが問題である。それがプロクロスまでを含めて新プラトン派の功罪としてどこまで言えるのかを、バイヤバルテス先生のことも含めて伺いたい。

アウグスティヌスを導いていた探究のロジックはおそらくこれとは違うところで動いていた。また一般的に言つて、古代教養の本来の場所はそれとは違うところだつたと思う。

これに対して、アリストテレスが *dialektike* と *apodeiktike* を分けて行く方向は *trivium* を分解する方向に向かうものをもって行っているのではないだろうか。アンモニオスの時代において、それがどの範囲まで進んでいたのかということ、水落先生のお持ちの全体的なパースペクティブと共にお教え頂きたい。

水落 健治

フィロロギッシュな問題から申し上げると、まず『トピカ』の話であるが、アンモニオスはアリストテレスの『命題論』の注解を書いていて、その序論の中でストアの *dialektike* を十分に踏まえ、かなり明示的に出してきている。当然そこでアリストテレスを注解しているのだから、『トピカ』はどのようなだろうかと疑問が起ってくるのだが、非常に不思議なことに『トピカ』が引用されているのは *Index* によれば二カ所だけである。地道に分析に時間をかける必要があるのだが、少なくともそこで『トピカ』のかなり中核的な *dialektike* について話している。それがどうつながってくるのか、なぜ二カ所だけなのかという疑問は当然あるのだが、今のところ、この問題に関しては

その辺までしかお答えできない。

一般的な話になってしまいが、アンモニオスという人はこういうことをやりつつも、どこか「これはすぐ世俗的なことなのだ」という意識でやっているのではないかと思える。Protreptike という言い方をしたが、最終的にはプラトンの何か言いたいというか、さらにプラトンにまで導くという、その下のところで何かをしているのではないかという気がしている。

アンモニオスの伝統の中で、アウグスティヌスが失われていくのではないかという話だが、そうでもないかも知れないという気がする。というのは、この著作そのものを見ていくと、非常に *dialectic* に思われる。ストアのものをわざわざ持ってきてそれと対論して、これはこうなんだというような、対論的な形で話が進んでいく。後の方を読んでも随分そういうところがあり、非常に学問的な論という形になっていて、この節はこう、これに対してこう、いや違うというような話し合いが進んでいく。その意味ではやはり *dialektike* がかなりソフィスティケートされた学問的な形にはなっているけれども、やはりまだ続いていくのではないかという気がする。

trivium-quadrivium については、アウグスティヌスの *dialektike* を少し調べてみたところ、*rhetorike* に関しては、かなり変わっていないのではないかと感じがする。例えば(樋笠さんにお聞きした方がいいかもしれないけども)、ディオゲネス・ラエルティオスの中で *rhetorike* の様々な形での区分が述べられていくが、その内容的な区分では、序論があつて、それから本論があつて、反論があつてというものと、それから記憶をして、それを言葉に表現してというようなものとか、そういう枠組みがもう既にディオゲネス・ラエルティオスの中に出てくる。そういう基本的な構造というのは、かなり根本的なところでずっと受け継がれていて、そんなに変わっていないという気がする。

結局、残りの二つが問題であるが、いわゆる *trivium* というのが、アウグスティヌスのころは、いわゆる *dialektike* といった名称で入っていく。しかし、アルクイヌスあたりになってくると *Logica* になってしまふということがある、そのところで *dialektike* から *Logica* になってしまつていくことは、そこには断絶があつて、そこでかなりの変質が起こっているような気がする。

このあたりのことは『パトリスティカ』第二号の清水哲郎さんの発表のなかでも触れられていた。

Grammatica と *Dialectica* というのがどの様に変容していったのか、以後どのような形になるのかという問題が当然出てくるわけだが、その辺が非常に苦しいところである。

それから探究の言葉の話であるが、これが一番難しく逆に言えば一番関心のあるところである。プラトン派の中にそれが残っていくのか、それともアウグスティヌスのかなり独自のものなのか、非常に関心はあるのだが、まだ見えてこない。

加藤 信朗

たまたま私の念頭をよぎっているのは『告白録』十卷(10章)のメモリア論の中で、自分のうちに *artes liberales* が潜められるというときに出てくるのは「あるか」「何であるか」「いかにあるか」という問いである。それらの問いが、三つの *res ipsae* として、事柄として心のうちに植えつけられていく。だからあれはやはり *dialektike* の問いと言える。それがアウグスティヌスの場合の、ロジカ

ルなもの一番基本としてあったという感じがする。

神崎 繁

簡単に二点ばかりうかがいたい。一つは用語上の問題と、それからもう一つは内容的なもの、つまり先に「*dialektike* の *logie* への矮小化」という趣旨のことを言われたと思うのだが、その点についてである。一つは用語上のことで、*apophantikos logos* を「肯定文」というように訳されているが、これは言明文という意味か、それとも肯定／否定の肯定という意味だろうか。水落さんの訳の *katégorikos* は、カントの *Kategorische Imperatif* の「定言」を取られているようにあるが、例えば *Sokrates peripatei* だったら、ソクラテスという *hypokeimenon* についてその *peripatei* という述語をつけているという文だと思ふ。言葉の訳語の問題かもしれないが、大きな全体の問題にもかわると思う。むしろ『命題論』の構造から言うと、徹頭徹尾 *apophantikos logos* から始まる。だが何故アンモニオスは、最終的には五番目で、これが一番肝心なのだと言うわけだが、その前提としてなぜ四つのもの（呼びかけ）「命令」「疑問」「祈願・希求」を枕として挙げたのだ

ろうか。その点にストアの影響を見るのは賛成だが、ただアンモニオスとしては「ペリパトス派、もしくはアリストテレスの文脈ではこう言う所を、ストアではこう言う」という言い換えを常にしており、対応関係に非常に気を使っていると思う。「アリストテレスの文脈でこういうことは、ストアではこれに当たる」と。恐らくそれは、彼の相手にしている学生たちの教養が、かなりもうストア化しているためだと思う。先に言われたアンテオコスのこともあるが、もう一人ポセイドニオスも、ペリパトスアカデメイアの伝統を受け継ぎつつストアのことを念頭に置いて文法論を展開している。その際 *Grammatike* がギリシアでどこから始まったのかという問題は、プラトン・アリストテレスではない訳だから、*trivium* の問題がどこから来るのかという問題につながる。

アンモニオスの頃はもう既に *Grammatica* ということがかなり成立していて、*Grammatikoi* という語彙が何度か出てくる。それはかなりストア的な立場の、ある種の体系化とか通俗化とかいった面で、学生たちが「言葉の意味は何か」と問うところから始まる。それがあゝ種の矮小化ということ、アリストテレスの『カテゴリア論』は *onoma*

の法則、「命題論」は命題 Logos の分析、「分析論」は syllogismos という矮小化になる。しかし「カテゴリア論」は、言語としての onoma の問題ではなく、まさに on の問題である。また「命題論」は文法学的な文の問題でなく、真偽に関わることである。

そういう点で、アンモニオスはかなりアリストテレスに忠実だと思う。つまり、ストアの体系でも全くある意味で同じことが言えるのだということを前提にして、議論をしているのだと思う。例えば仮定命題が出てくる場合、アリストテレスの syllogismos の中には本来の意味で仮言的な syllogismos と違うのではない。それをきちんとした形でやるのはテオフラストスだと言われている。

なぜここで仮定文の話をするかというと、アリストテレスのいわゆる Barbara というものは、ストアの中では全称命題がないために仮定文で表す。つまり、例えば「全ての人間は動物である」というと、「人間がいればそれは動物である」という形で全部翻訳するわけである。そのときに実質上全く同じことがアリストテレスの方式とストアの方式で等価な形で出てくるが身分は違う。アリストテレスの場合は一応普遍的な何物かを、ある程度認めなければなら

ない。けれどもストアの場合はそういう普遍者を認めていない。だから仮定文というのはストアにとっては非常に重要になる。

アンモニオスが一番そこでこだわっているのは、真偽に関わるという点に関して、仮定文がどういう役割を果たすのかということだと思う。本来のアリストテレスの立場から言うと仮定文は真でも偽でもない。しかしストア派にとっては、仮定文がないと全称命題は言えないので、仮定文が何かその真偽に寄与しなければいけない。そこで文の対比というのがかなり大きな意味を持っていると思う。

第二の論点。水落さんの御主張の一つの背景には、ストアの dialektike が何らかの形でプラトンの dialektike の理想を継いでいるという前提で話しておられると思うが、その点が納得できない。問答法という意味での dialektike というのは、ストアの中では消えている、もしくはルーツが全然違うと思う。アリストテレスの証言にあることだが「dialektike を発明したのはエレアのゼノンだ」と言われる。それをどこまで文字どおり取るかだが、エレア派起源の dialektike とソクラテス／プラトンの dialektike がどうなっているのかというのも大問題である。多分プラト

ンの『パルメニデス』の中でそれらが融合したと考えられる。ただストアの領域では、明らかにパルメニデス（ゼノン）メガラ経由であり、だからソクラテスと関係ないとは言わないが、その回路を混線させて「類落」を言うのは公平ではないと思う。

「同じ事柄が、アリストテレスの言い方でこう言えるけれども、ストアでもこう言える」という場合、どちらに優劣があるのかということアンモニオスは常に言っていると思う。むしろ「アリストテレスはプラトンの *protreptikos* である」というような形で、彼はアリストテレスをそれほど高く評価しないが、ストアよりは評価する、といった位置づけをしていると思う。

『パトリスティカ』第二号の清水哲郎さんの討論の中で指摘したのだが、アリストテレスの『詩学』の中に「logos でなくて *lexis* と *onoma* と *rhema* という分類がある。一方プラトンの『国家』篇の第三巻に *diegesis* の分類があり、*lexis* の種類について言われている。けれどもアリストテレスが『命題論』でやっているような *logos* の分析は、『詩学』とか、あるいはある意味でその先駆になっているプラトンの『国家』篇第三巻の *diegesis* などとは

違う文脈でやっている。ところが、ストアにとってそれは全然別のことではない。ストアにとっての *dialektike* は、*grammatical* な *logike* の一部であり、言葉全般の中の一つの分子としての位置づけである。この点はアンモニオスにとってはかなり明らかではないか。だから「*dialektike* から *logike* への類落」というのは素直には受け取れない気がする。

水落 健治

今の件に関して、仮言命題のことが出てきたので一言説明したい。アンモニオスは、具体的には『分析論』の中の *prolepsis* を引いてきて、大まかには以下のような話をしている。つまり「AならばBである」。「Aである」。ゆえに「Bである」。そういう一番単純な推論、仮言三段論法の推論がある。そのところで「AならばB」というときに、また別の仮言三段論法を持ってきて「XならばAである」とすると、「XならばAである。AならばBである」。ところで「Xである」ゆえに「AでありBである」といったことになって、際限なくつながっていくだろう、という話が一つ。

もう一つは、その際限なき連鎖に関して、とにかく「Xである」ということは、最初のところでは定言命題といった形できちんと抑えられていなければならない、ということである。それからもう一つそこで出てくるのは「AならばAである」という形である。つまり「AならばB」というのを認めないという形があり「Aである」ということを認めないで、「Aが認められるのは条件つきだ」ということになると「XかつAならばBである」「XかつBである」∴「Bである」という場合に、その「かつ」というのを付けるときに、Metalepsis といった言葉を言ったりする。そういった『分析論』の中での話を持ち込んだりする。基本的にはいずれにしても仮言を進めるだけではだめだということが出てくるわけで、その点をまず確認しておきたい。

神崎さんのご質問であるが、一つは「ストアの dialectike」というのは、プラトン経由のものとは違う」ということと、それから「当時のアンモニオスが相手にしていた学生・シュールの人たちが、かなりストア的なものを持っていた」という、その二つが前提としてあって、そして「ストアではこうだ」「アリストテレスではこうだ」というように言い換えられる、そういう形で議論が進んでいるので

はないか、というご意見であろう。指摘いただいた観点で読み直さねばならないと思うが、ストアがいう *axioma* 「決議命題」*ekthetikon* 「指定文」*homioion axiomati* 「疑似命題」はアリストテレスに対応させられるが、それ以外のものは少なくとも *logike* からははみ出ていく。アンモニオスの *logike* というのは、確かに頽落という言葉は強過ぎたかもしれないが、この *logike* を非常に限定された意味で *logike* というものを見ていると思う。

神崎 繁

アンモニオスの制限というよりも、むしろ『命題論』そのものもつ目的の限定だと考えるが。

水落 健治

そのことについては、全くそのとおりだと思う。

神崎 繁

アンモニオスは、アリストテレスの『命題論』よりも少し広げようとしているところがあると思う。*logos* の場合は「物 *pragma* を求める」というのと、人に対して「pra-

xis を求める」、目上の人であれば祈願文、という箇所がある。当時のホメロス解釈では、神様に命令する時、それを命令文と言えるのかという議論があった。それはアレクサンドリアのフィロンがそのまま受け継ぎ、例えば「Kyrie eleison」と言ったときに、神に命令しているのか」という問題になる。つまり文法的な形式は命令文だが、中身は祈願や願望であったりするわけで、文法と実体の話でかなりおもしろい話がある。アンモニオスは多分、そういう文脈をどこまで念頭に置いていたのかわからないが、ここで二つの能力「認識能力」と「欲求能力」*dynameis orestikai* を挙げている。ここは確かに『靈魂論』を受けていると思う。それだけではなくて『ニコマコス倫理学』第六巻に、*praktike arete* に関わる、つまり *orexis* に一致するといふことが行為の場合には真である、と言われる。あそこで明らかに行為の場合「何々せよ」という命令文が出てくる。ところがアリストテレス自身が、*praktike* という限定はついているが、ある種の *apophantikos logos* を語っている。故に、アンモニオスとしてはそこで『命題論』の狭い範囲での *apophantikos logos* だけを念頭に置いているのではなく、ある形での *orektike dynamis* に注目し

ていると言える。そういう点ではアリストテレスよりも貧しくなっているというよりも、アンモニオスが豊かにしようとしているような気がする。

水落 健治

興味深い点を付言しておく、*Pragma* という言葉を使うときに、注があるのだが、当時の文法学の用語として不定法が意味されている、と言われている。つまり活用し、人称形になった動詞ということではなくて、むしろそういうものを除いた不定形を文法学で *Pragma* として言っていた、という注がある。それがどのように内容的につながるかという問題が残っている。

加藤 武

お二人の論争を大変興味深くうかがった。先に加藤信朗先生が引かれた『告白録』の讃歌のところ、真偽だけではなく疑似真偽というか、そういう *pseudo* な要求があって、それなりにある論理である。そこになると、アウグスティヌスの非常に豊かな言語感覚がそこに働いている。しかもそこに論理がないかという論理がある。そういった

アウグスティヌスの対話論的な探究というものは、アンモニオス——恐らくストアをも含めて——にはできなかつたのではないか。アンモニオスの網だと、アウグスティヌスの魚は掛からないという気がする。アンモニオスの英訳を少し読んだが、同じアリストテレスの『命題論』の最初のところの解釈に関して、ポエティウス、アペラルドゥス、トマス・アクィナスという流れがある。その際にポエティウスが非常に優れた役割を果たし、彼のところで明晰になっている、ということがある。だから単に頹落というのではなく、痩せてゆくことにそれなりの自然責務というものがあつたのではないか。痩せさせることで、身軽にもなるのだから。

水落 健治

アウグスティヌスの *De dialectica* 関連の仕事をして
いる途中で、このアンモニオスを軽い気持ちで読みはじめ
たのだが、それがアリストテレスの *Ἦται* という箇所
の注解だった。ここでは「*logos* が *theses* であるか *physiai*
であるか」といった話との関連で議論が進んでいた。そこ
に *phonetike dynamis* という言葉が出てきた。具体的に

は主に発音器官、口とか鼻孔の話で、その言葉が持っている「音」と、ロゴスとがどうつながるかという話が延々と展開されていて、その術語が理解できずに最初から読みなおすということになった。結論的には、自分が言ったことを否定することになるかも知れないが、*logike* を非常に限定された言い方で使っていた。それだけかと言うとそうではないものもある、という面がやはりあつた。「*Ἦται*」あたりについては、『詩学』の方向へ行く話を扱っているような気がする。そのあたりを突き詰めた後で、今日の箇所などがどのように理解されてくるのかを考えてみたいと思っている。

アウグスティヌスの『告白録』の最初のところも、むしろ今言ったような箇所との関連でどのように見えてくるのかという点が課題である。

加藤 武

うかがいたいのは、現代の言語学だと文が単位なのか、語が単位なのか。 *onoma-rhema* という問題が出てきて、命題という形で取り上げられてゆく。アウグスティヌスの場合の基本的な考えとしては、言葉の単元は文であつて、

語の集合体ではないと思う。その点についてはアンモニオスの場合はどうなのか。この問題は、小さいように見えて非常に基本的な問題だと思う。「真偽の判断は文でなければできない」というのはアウグスティヌスの *dialectica* の中にあるのではないか。やはり言葉の形式として「文か語か」という問題は大きな問題になるのではないだろうか。

加藤 信朗

Logica というものを狭い範囲で限って、瘦せさせることが、身軽になることだという、先のご指摘はその通りだと思ふ。同時にその狭い *logica* では扱わない、扱えない部分がむしろよそにあるということを示しているという、それは確かにそうだという感じがする。以前の清水さんの時にも話題にしたのだが、ロドスのアンドロニコスによる *Corpus Aristotelicum* の編集が、一体どういうことだったのかということの問題化して行かざるを得ない。結局『弁論術』とか『詩学』というものを後ろに持っていて、しかも、オルガノンから外したように見える。あのようには外すと、*dialektike* つまり『トピカ』というものの位置もはっきりしなくなってしまうので、つい『トピカ』の

研究も緩くなってくるというのがアンドロニコスの編集の順序にする場合に起こってきたということがあるのではないか。

ところが、Brill から出ている Louvain の博論だっと思うが、アラブのオルガノンの研究の中には『弁論術』と *dialektike* がそのオルガノンの中に入った形で構成されているものがある、という指摘を見て、非常におもしろいと思った。ロドスのアンドロニコスの校訂と言っているあの順序では、最初からそうだったのか、誰かがそうしたのかよく判らないが、『弁論術』も『詩学』も *Politike* の範囲に入ってくる。要するに理論学と実践学を分けてしまい、さらに余りはっきりしないものを後ろの方に持っていた。近代のアリストテレス解釈がそういう構造を持つたということが問題であり、それをもう一度復元してやるという場所がありはしないか、という点を今一度申し上げておきたい。

柴田 有

最近ストア派をやる方が世界的に増え、日本でも増えてきて *lekton*, *tychannon*... などと新しい分類表が出てき

て、その分類についてゆけないことはないが、あまり面白くないさそうだという気がしていたが、今日のお話をうかがっていると、自分でも興味を持つことができるかも知れないという気がしてきた。というのも、こういう言語論の話は、靈魂論と結びついた形でやれないかと思うからだ。アンモニオスの注解の中でも、最後の方で「魂に二つの能力がある」といったことが出てくる。さらにその続きで「定言文」*apophantikos logos* は「その魂の認識を解釈する者」*hermeneus*である、という形で「魂の認識」という言葉が出てくる。その場合「魂の認識」と、それから *hermeneus* 「解釈者」としての言葉と、その間の身分の關係とか、あるいはその間で用いられている解釈とかに着目して言語論というのを考えていく方法はないだろうか。もしそれができるならば、こういう話ともかくもプラトン派の内部で、五世紀から六世紀にかけてのアンモニオスという人を通じて出てきているのだから、例えば新プラトン派が出てきた *hen* の問題とか *on* の問題とか、あるいは新プラトン派にいく前でもかなりストア派の影響も受けて薄弱になつてしまったイデア論の問題は、この言語論とのつながりを回復しうるかも知れないというように思っているのだ

が。そういう見通しについてはどう思われるか。

水落 健治

きょうは扱わなかったが、きょうの序文のうち翻訳しなかったところに、著作の真正性の問題や区分などの話が出てくる。その次からいわゆるコメントリーが始まる。『命題論』の一番冒頭の部分では、まず *pragma* があり、それから *pathemata tes psychés* があり、*phone* がある、*graphe* があるという、あの構造が一番最初に出てくる。そのところで、これは次の課題としたいのだが、面白い箇所がある。幾つかキーワードが出てきて、例えば「*phone* は *pathemata tes psychés* の *symbolon* である」という表現が出る。アンモニオスは「その *symbolon* は、*pathemata tes psychés* と *phone* との間の關係を説明する」といって、「*pragma* と *pathemata tes psychés* の關係をも説明している」といって、「*pragma* と *pathemata* との間の關係は必然的である。しかし *pathemata* と *phone* の間の關係は *symbolon* であるから、*thesis* である。また *phone* と *graphe* の關係も *symbolon* であるから *thesis* である」といっている。やいな「*thesis* だ

ある場合は「*vs* 多の関係である」とする。そして「一つの音を表すのに多くの文字がある、それも *symbolon* であるから」*vs* 多の関係である」式の議論を延々とやる。いま私は、次の課題としてこのあたりに非常に興味を持っている。そこで「必然的である」といった話をどう考えるのか。このような点は言語の基礎論として考えてみたいと思っている。

鎌田伊知郎

わたしは学識や言葉ということには不案内だが、今の話に言語と靈魂という観点がでてきて、わたしもそういう角度で考えられないかと思う。具体的には「というのも、この場合魂はそれ自体として働くのではなく、その「欲求能力」を完成する *tychein* ために相応しいと思われる他者に向かって自らを広げてゆくのである」という箇所が大変興味深い。これは具体的にはどういうイメージとして理解すればよいだろうか。この箇所は非常に広げて考えられると思う。

水落 健治

この箇所は非常に困った箇所である。疑問として思いながらまだ十分に考えていない。ただ *tychano* であるから、まさに色々な意味が考えられる。むしろそこをきっちりさせるために、コンコードダンス等を使って用法を抑える、その際に独自のものが出てくるかも知れないという気がする。

鎌田伊知郎

私はたまたま *Prudentius* という詩人をやっている。殉教者のための詩を訳したりなどしたが、その中で殉教者が異様に神に対して喋る。祈願、神への命令のようにも取れる。単純ではなくレトリカルな弁舌を振るう。しかもその場合魂というのは明確に救われたい、肉体から解放されたという通常の要求以上の恐ろしい要求を持っている。そういう場面に遭遇し、そのときの殉教者の言葉が声なのか弁舌なのか、命令なのか要求なのか、魂が通常出すような要求能力に導かれているのかを考えた。今までと違った形の雄弁が、キリスト教的なものと同なるなかで、神を介して一つの空間を拓いてゆく何らかの可能性がありはしない

だろうかと思つた。

水落 健治

これからの論文の課題を示されたようであり難い。

熊田陽一郎

「人間のもつ二つの能力」のところで、「質問文および尋問文の場合は、欲求能力から出る」とされ、したがって「通常の認識能力から発せられる肯定文とは違ふ」とされている。この分類は非常に面白いと思う。確かに質問文の場合「知りたい」というわけで、欲求能力と認識能力とはほとんど区別できないと思う。「あそこにいるのはソクラテスか?」という問いが出て「そうだ」と答えられると完結する。だから、質問文が欲求能力のほうに入ってしまうのはよく分からないのだが。

水落 健治

わたしもよく分からない。テキストそのものにはこのように書いてある。ただ、基本的には欲求能力の方は自己完結的ではなく他者に *tychein* する。その点でしか分けて

いない。だから *tychein* の内容が認識に関わる場合についてどう考えてゆくのかという点は、わたしもよく分からない。他の祈願文や命令文ならわかる。

ただ、問答法 (*Dialektik*) について触れているところがあり、「命題というのは、相手に対して示すものだ」といった節がある。そのあたりを分析すれば、鍵が見つかるかも知れない。それと *exangelikon* という語彙を掘り下げてみれば、関連がわかるかも知れないと思う。

熊田陽一郎

dialektik という語彙の意味自体が「問答することによって認識する」ということであるならば、このように分けられてしまうのは不可解である。

水落 健治

「古の人が「命題」と名付けたものを、何らかの推論を行おうとする者たちが言論の相手に提示する」という表現がある。ここの表現と、先ほどの *exangelikon*、つまり「魂のなかで起こったことを外に出し、*dialektik*」という場面において提示する」という表現を比較することで

何か見えそうな気がする。

樋笠 勝士

二つほど質問したい。一つは、「完全 (autoteles)」 「不完全 (alipias)」 というペアの言葉に注目され「アンモニオスの理解するアリストテレスの弁別とストアのものとはかなり違っており、アンモニオスの方が狭く厳密に弁別している」という指摘をなさったが、「完全」「不完全」というカテゴリーがどのあたりまでカバーするかを抜きにして、実体として両者を比較すると、ストアの方では「完全」ということの基準が「文として成り立っていればよい」ということで、質問文は入る。だが結局「論証」に係る場合は、*axioma* (命題) ということになり、*chresimon prostates apodeixeis* 「論証に役立つ」となるから、ストアでも同じことになる。それにも関わらず「完全・不完全」という弁別基準がこのように違う理由がどこにあるかを簡単に考えてみると、アンモニオスの理解するアリストテレスの方が論理的で、ストアの方は文法学的 (文として成り立つかどうか) である、といった色分けしてもよいのだろうか。

水落 健治

先の神崎さんに対するお答えと同じになるかも知れないが、彼はそうすることで論理学を狭く考え、そういうかたちで境界を作っているということになると思う。

樋笠 勝士

もう一つの質問。ストアの *dialektike* の定義が三種類出ている (「一問一答でなされる議論において正しく対話することのできる知識」「真と偽、および真でも偽でもないもの *kai oudeteron* についての知識」「指し示すもの *semainonta* と指し示されていること *semainomena* に関する学問」) が、みな位置づけが違うような気がする。今日のお話では一番目の定義に比重を置かれ、比較されて「豊かさが捨てられていった」という趣旨のように何ったが、三番目の定義の *semainonta* の中には、品詞論とか *poïna* に関する議論などが多くある。この部分が第一第二の定義では十分に生かされていないと思う。

水落 健治

そのことに関しては、二番目の *kai oudeteron* という

のがそこに入るだろうと思う。この kai oudeteron はかなり重いと思う。

樋笠 勝士

論理的なところに重心を置いた定義と、そうでなくただ領域をカバーするような定義の仕方があり、どのあたりが焦点を絞ればよいのか。むしろ三番目の方が *dialectike* の領域をカバーすると思う。比較したときに、アンモニオスによるアリストテレス理解はどうなるのかをもうすこし考えてゆくべきだと思う。

水落 健治

senainomena というのはストアでは完全に *lekton* と言っただけだろうか。

樋笠 勝士

それはいいと思うが、*senainomena* の領域の中には表象論が扱われる。表象論は物体との関わりについて論じられるから、*senainomena* の領域がすべて非物的なものに集中しているとは思えない。

水落 健治

アンモニオスには *dynamis phonetike* のような、解剖学的な用語が頻出する。そういうものも含めた *senainomena* ということが言えるかも知れない。そうすると表象も含めることができるかも知れない。

加藤 信朗

大変豊かな討論が重ねられ、問題点がさらに見えてきたように思う。討論を伺っていていろいろと示唆される点があった。実際はこれから探究が始まるといった点にさしかかっており、水落さんが初めて開拓して下さったテキストを、日本語でうかがったわけだが、改めてギリシア語を眺めると、非常に豊かな言葉が繰り広げられていると感じる。アリストテレスの書物、その繰り返しに過ぎないだけではないものが出てきている、それが、このアレクサンドリアという共同探究の場所を証拠立てているということであろう。

最初に水落健治さんがご説明下さったようなスコリアとヒュポムネマタ、これは一つのヒュポムネマとして書かれたものであるが、わたしも昔『ファイドロス』のムネメイ

アとヒュポムネマの言葉の使い方が、プラトンの中で微妙

に用いられていることを指摘したことがあるが、ヒュポムネマ、メモリアというものは、何らか自分自身に帰ってゆく、そこで新しく問題を展開してそれを誰にでも読めるような形で提示する、ということが、この時代の共同研究の探究のスキムであったと思う。その一つの証拠として示してくれていると思う。その現物をこういうかたちでここに展開して下さったために、なるほど読んでみるとアリストテレスを読んでいるだけでは出てこない言葉が頻出する。確かに、古代のある場所で起こったこの共同探究の現象を見てゆくとともに、私たちの場所もその一つの流れを汲むものであることを期待したい。

水落 健治

もともと私はLatinistとして仕事を始め、最近ギリシアをやっているので、神崎さんに教えていただくことも多い。加藤武先生も先に言われたが、事柄そのものの問題性・つながりは非常に深いところにあると思う。今日ご指摘頂いた点は多々あり、感謝したい。

第八〇回教父研究会

(一九九七年四月二六日 於聖心女子大学)

司会者 加藤 信朗 (東京都立大学名誉教授)

発表者 水落 健治 (明治学院大学)

発言 樋笠 勝士 (神田外語大学)

加藤 武 (立教大学名誉教授)

鎌田伊知郎 (慶応大学大学院修了)

熊田陽一郎 (中央大学名誉教授)

神崎 繁 (東京都立大学)

柴田 有 (明治学院大学)

◎討論の記録については、論旨を明確にするために、多少表現を改めた箇所があります。